

# 本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター  
2008年1月15日 第16号

●発行元 人文ネットワーク  
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部  
●事務局 (株)新評論編集部内 (担当: 吉住)  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 3-16-28  
Tel. 03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832  
E-mail: jinbun-net@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

特別  
寄稿

★ 片岡幸彦 .....『ブラック・アテナ I. 古代ギリシアの捏造 1785-1985』の邦訳出版によせて

## われわれにとっての ブラック・アテナ

かたおか・さちひこ

立命館大学、羽衣国際大学教授等を経て、現在グローバルネットワーク21 (GN21) 代表。国際関係論、地域研究論。編著に『地球村の思想』、監訳書にT. ヴェルヘルスト『文化・開発・NGO』他。『国際関係を、第一に地域、特に第三地域の視点から、第二に広く学際的な手法によって、そして第三に欧米近代文明の功罪を問いつつ、将来への明るいシナリオ構築を目指す立場から、日々勉強を続けています。』

### 人種主義・進歩主義・植民地主義を生んだ欧米近代

17-8世紀のルイ王朝の繁栄を背景に、新旧論争が文芸の世界に起こりました。未決着ながら、そこには近代西欧芸術のルーツとしてのギリシアの登場と、新しい近代が古い古代を制するという思想の予兆が見られました。やがて19世紀、西欧列強はエジプトはじめアジア・アフリカ諸国を植民地化する時代に入る。科学の発展と共に古代エジプト人はアフリカ黒人であるという学説が有力視されてくるのもこの時期です。するとそれまで当然のように信じられていた古代エジプトのギリシアに対する優位が西欧中心主義者には面白くなくなる。そこで彼らは、先ずは進歩主義思想を援用して、古代エジプトに対する古典ギリシアの優位を主張し、次に進化論から来る「優生学」を用いて、黒人に対する白人優位説を発明する。そして最後に、前5世紀以来長い間通念となってきた「アフリカ起源説」を廃棄し、アーリア語を話す北方白人種が古代ギリシアを征服してヘレニズム文化を発明したとする新説を主張するに至るわけです。以来各種の「コロニアル言説」が世界中に毒素を撒き散らすことになりました。

### 学問と論争のあり方について

中国近代政治史の専門家であったバナールは、歴史の真実を明かすために、こうした欧米中心思想による「歴史の捏造」に異を唱え、敢えて専門外の古代史の領域に踏み込みまし

た。しかし『ブラック・アテナ』刊行間もなく米国の東部エスタブリッシュメントの学者世界から、「素人が何を言うか」と一喝され、以来未だに大学では「異端児」視されています。実は18世紀プロイセンの文献学と古代学の成立の例で明らかのように、一たび学問が政治権力によって社会に定着すると、学問・学説は専門的権威を主張して、他を排除する傾向が高まります。当然の如く専門家以外からの論点提示は難しくなる。英文学者サイドには及びもつかないが、私は1993年のパレスチナをめぐる「オスロ合意」について、著名な評論家氏とは一味違う意見を求められたことがあります（『京都新聞』9月23日、「中東の相克」下）。パレスチナ問題を操り、利用する米国の中東戦略の狙いを洞察すれば、これで解決の方向が見えたとする当時の大方の意見は甘かったと言えます（アラファト、キッシンジャーのノーベル平和賞授賞という茶番劇付き）。むしろ更なる厳しい状況の進展を懸念した「ド素人」の私の方が、事の成り行きを言い当てていた。時に素人は常識を踏襲し勝ちな専門家とは異なる視野や論点を持つことで、共有すべき真実に近づくことができるのではないのでしょうか。

### 文化とアイデンティティの再定義

私たちは『ブラック・アテナ』から、18世紀末以来続いてきた欧米中心主義の政治経済文化が世界に何をもたらしたかを、先ず学ぶ必要があります。彼らの「捏造」によって、いかに多くの他の世界の人たちが心の故郷を捨て、あるいは失う悲劇を被ったかを忘れてはならないからです。長い間に培われた文化は人々に生活の安定と心の安らぎを与えます。その文化を欧米中心主義は根底から揺さぶり続けて来た。欧米人自身も含め、今、その近代を模倣してきた私たちは、生きるための心の拠り処

を見失いかけています。そういう時に本書は、私たちに人間としての真の生き様を回復する勇気を与えてくれたと言えます。学問や思想のみならず、私たちはつねに自己革新の精神を大事にしなければなりません。人は故郷がなくとも生きることは出来るが、心の拠り所を失った生活には出口のない迷路が待っている。パンは与えられたパンではなく、自ら求め、自ら造り出したパンでなければ、人の糧とはならない。文化やアイデンティティについても同じことが言えるのではないのでしょうか。社会に根付く伝統文化のルーツを再検証し、他文化の受容の歴史に気づき、自文化のみに依拠するアイデンティティから自らを解放すること。このような自己革新の努力と未来へのヴィジョンを欠いた安易な文明の対話論や多文化共生論には多くを期待できないと思うのです。❧

❧「ブラック・アテナ」とは バナールは本書序論で、紀元前22世紀からの千年間、エジプトの古代ギリシア征服事業を背景に、ギリシアのエジプト文化借用があったことを指摘。そこでエジプト宗教のギリシア移転を、次のような例を引いて説明。「アテナ神はエジプトのネイト女神であり、アフロディテやアルテミスなどの諸神もこの時期に採り入れられたのかもしれない」（63-64頁）。書名『ブラック・アテナ＝黒人アテナ神』の由来である。

❧「ブラック・アテナ論争」とは 『ブラック・アテナ再考』（1996）で、専門家19人がバナールを手厳しく批判したのが始まり。その後バナール自身が著書『ブラック・アテナの反論』（2001）で応え、またその間両者の論点を整理した『大学における異端』（J. パーリナブラウ、1999）が更に論争に火を付けた。『ブラック・アテナ』は10か国語以上に翻訳され、論争は熱くなるばかりである。

### ブラック・アテナ 古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ I. 古代ギリシアの捏造 1785-1985

マーティン・バナール/片岡幸彦監訳  
新評論 2007年5月刊 672頁 6825円



「古代ギリシアは非西欧由来の混成文明によって発展した。」人種主義・科学万能主義に基づく「正統派」近代学芸精神と正面から対峙し、捏造された古代ギリシアを解剖。主流・中心・定説などの支配的価値に立ち向かう豊かな知的運動と、その「深化と蓄積の過程」。

# ブラック・アテナという問い、 ブラック・アテナという出来事

2007年6月30日、第54回例会が『ブラック・アテナ』の監訳者片岡幸彦氏を囲んで大隈会館3階会議室で行われた。当会からの参加者は、桑田、土屋、片桐、大野、入江、永田、李、白石。議論は近代ヨーロッパにおける古代ギリシア像の「捏造」から、今日の文化とアイデンティティの問題にまで多岐におよんだ。以下は各人の発言要旨である。(編集=白石)

## なぜ『ブラック・アテナ』なのか？

片岡 ギリシア文明のアフリカ起源が唱えられたことはかつてもありました。米国のデュボイスやセネガルのディオップなどです。しかし、そうした歴史への異議申し立ては、まさに黒人の歴史家による政治的な見解として受け止められてきた。他方、本書の著者バナールはケンブリッジ大学などで教育を受けてコーネル大学で教鞭をとった、いわば白人のエリート。つまり、ヨーロッパの文明や文化、あるいは近代の起源そのものの「混成」という問いが、その内部から発せられたことにまず重要な意義がある。

また第二に、バナールが古代ギリシア史の専門家ではないことも重要な点です。彼はギリシア文明についての歴史記述を三つの「モデル」に整理する。すなわち、古代ギリシア人自身の「古代モデル」、その後の近代に「捏造」された「アリア・モデル」、そして本書の提起する「修正古代モデル」。こうした「モデル」の概念自体、クーンの科学史『科学革命の構造』に由来し、さらにバナールは中国史を専門としてきた。本書において、二つの異質なも

のが古代ギリシア史に介入しているものであり、そこには「アマチュア」ゆえの刷新と発見がみえています。

そして第三に、われわれにとっての本書の意味とは何かという問題がある。なにより私自身、狭い意味での専門から離れていったという経緯があります。もともと19世紀フランスの詩を研究していましたが、その後アフリカ文学と出会い、アフリカの植民地主義の問題、さらには90年代に雑誌『グリオ』の編集にたずさわって、まさに「アマチュア」として、欧米が主導する近代の歴史そのものの再考へと促されてきた。そして、こうした近代を問い直す作業は、自由主義市場経済の食欲なグローバル化が進む一方で、「美しい国」などという言説が流布するなかで、ますますその必要性をましていると感じています。私の立場は川端が心寄せた「美しい日本の私」なのでしょうか？ それとも大江が主張した「あいまいな日本の私」なのでしょうか？ バナールが本書で示した「混成的文化文明」という観点は、われわれがそれぞれ場で「アマチュア」として取り組むべき今日の問いであると思います。

## ローマン主義の現在性

片桐 本書ではローマン主義が「捏造」にはたした全体の見取り図がすっきりと説かれていきます。ローマン派の文学作品では、古代ギリシアのみならず、エジプトやインドも描かれるが、そうした個々の記述と「捏造」の関係について

は考えさせられるものがあった。起源をめぐるローマン派的な思考が何を仮構し、何を排除していたのか？ それは近代や民主主義の根幹にかかわる問題であり、ひさびさに本格的なものを読んだという読後感がありました。

李 近代や民主主義、あるいは文化の「起源」をめぐる問いは、台湾でははっきりと出てきます。だからローマン主義は現在の問題。もちろん、近代や民主主義を単純に否定するのではなく、その虚構性を正当化するために起源を求める必要があるのか、ということを考えさせられました。それはクレボンが『文明の衝突という欺瞞』でいった「起源としての翻訳」に通じていくのだと思う。

## アマチュアであることの意味

入江 「アマチュア」であることは、それ自体は何ら忌避されるべきものではない。とくに本書はある種の素人性によって成り立つのであり、それ故にこそ刺激的なものになっています。一例ですが、たとえば日本の運動史は、これまで「内地」の運動と植民地の運動との関連をあまり記述してこなかった。しかし、受けた影響は大きかったと思う。それは

良きことすべてがエジプトやシリア・パレスチナから生まれたと言いたいのではなく、きわめて強力な雑種文化からそれらは生まれたのだと言いたいのです。

マティン・バナール『ブラック・アテナ』p.114-115

## 哲学にとっての古代ギリシア

### ● 桑田禮彰 (駒澤大学教員/現代思想)

歴史叙述には不可避免的にイデオロギーが付着する。特定の時代について、特定の時代の特定地域において、それは顕著である。バナール (と表記すべきと思われるが) によれば、古代ギリシアについて、18世紀以降 (とりわけ、カントとともに自己の原因の探究が自己の起源の探究となって、「超越者」から離れ「過去」へ向かうようになった19世紀以降) のヨーロッパにおいて、歴史叙述は欧米中心主義 (白人中心主義) のイデオロギーに席卷された。歴史叙述は、「優秀」を含意する「人種」概念や、「野蛮」の存在を前提する「文明」概念など、検証・論証不能な諸概念を使用しながら、自己の起源の探究を、自己批判性を見失ったまま自己の正統化ないし美化のために展開するとき、イデオロギーの泥沼に足を取られる。ヘーゲルをはじめとする多くの哲学者たちの歴史叙述も例外ではない。しかし、哲学によるこの泥沼からの脱出の努力、自己の起源の批判的探究、自己の起源との多様な格闘を無視するもの、同じ泥沼に足をとられるもうひとつの仕方である。西洋形而上学の起源としての「古代ギリシア」に対するハイデガーやデリダの闘いがあるし、むしろ異郷としての「古代ギリシア」に導かれながら展開される西洋近代の起源としてのキリスト教世界に対するフーコーの闘いもあるではないか。

## ローマン派の源泉へ

### ● 片桐 祐 (青山学院大学他教員/文学)

ギリシアをも包摂するオリエンタル・エキゾチスムを投じた19世紀西欧のローマン派は、その文学的エネルギーのひとつを秘教的思想群から汲み上げた。この「彼方」への視線が古代エジプトからインドへと転じる経緯を、バナールは「歴史の捏造」としてじつに説得的に提示した。

だが、ローマン派を研究する者には、バナールの功績をさらに、源泉としての秘教的思想群を問う作業のなかで検証する責務がある。とりわけ、これらの思想をタブー視しがちなアカデミズムの風土においては、そうである。一次資料の不足と分析ツールの欠如がその理由になるのだろうか。しかしそもそも秘教的思想は西洋近代の合理的体系のもつ分析・分類ツールによっては解決不可能であるがゆえに、封じ込められてきたのではなかったか。ならばいっそう、ローマン派研究にとどまらず、西洋近代の全体的理解のためにも、わたしたちは秘教的思想の解明を急がねばならない。この思想と人種主義との接合によって、文明化の仮面をまとう植民地主義への助走路を用意してしまったローマン派の行く末を知れば、その思いはなおのことである。

## 「出来事」と「歴史」

### ● 土屋 進 (中央大学他教員/現代思想)

ブラック・アテナ論争の根幹には歴史とは何かという大きな問題が横たわる。歴史が対象とするのは出来事だが、出来事は構造的に複数の意味を持つ。意味とは「出来事」とそこに関わる主体との間に生起するからだ。主体の記憶や生活空間の差異は必然的に意味の多義性をもたらす。多くの歴史はこういった多義性を遠近法で整理してきた。歴史の主体を消失点として隠しながら、ファンやサイドが明らかにしたのは、この「消失点に隠された主体」による暴力だった。

たとえばファンは、「疾患として特定された病」は植民地化がもたらした出来事にすぎず、そこに意味を与えて負のコードに分類したのは消失点に隠れた不在の他者であり、「ネグリチュード」という言葉で消失点を変えれば、病としてコード化された出来事は「解放のコード」になることを明らかにした。

ファンやサイドは他者の視線により出来事を相対化したが、バナールはさらに進んで、実体として存在すると思われていた正統的歴史そのものに根元的な暴力が隠されていることを明らかにした。ここに「関係の歴史」へと向かう水脈がある。

どの学問分野でも同じであるが、  
その根底を揺るがすような挑戦は、外部から仕掛けられることが多い。  
なぜそういうことになるのだろうか。

マーティン・パナール『ブラック・アテナ』p. 45

専門家が自分の「分野」で対象を切り取ったことに起因するのかもしれない。今後、多領域の交錯は、アマチュア性がそのポテンシャルを解放し、既存のものを揺るがすでしょう。素人性はそういう「強み」をもっています。



読書会の模様

永田 専門家はテクノクラートの性質をおびざるをえません。だが、出来事はそこに収まらないようなところで生じている。ギリシア文明の成立という事件も、アマチュアとしてのまなざしによって、はじめてその混成状態が見出されたのだと思う。「モデル」という概念の超越的なところは気になったが、本書を通して感じたのは、何かを産出する事件としての混成状態が普遍的なものであり、そこには沸き立つような楽しさがあつたにちがいないということです。

白石 アマチュアとは語源的には愛する者であり、愛する者は模倣する者です。かつてタルドは『模倣の法則』で模倣や伝播の観点から社会や文化を語りましたが、彼が敵対していたのはゴビノーらの人種主義者だけでなく、社会を組織として語るデュルケムだった。だから

ギリシア文明の起源に混成状態、つまり模倣や伝播をみる本書の賭け金は人種主義だけではない。そのアマチュア性において、社会や文化、あるいはアイデンティティといった問題群そのものの再考がせまられている。

#### ❖ 文化とアイデンティティへの問い

桑田 本書では近代ヨーロッパのアイデンティティの確立作業において、その起源をギリシアに見出すためにアジアやアフリカを切り離していったことが語られます。ところで、哲学が歴史を語り始めるのはカントあたりからであり、ヘーゲルでクライマックスをむかえる。この19世紀のいわゆる「歴史哲学」の言説の実践も近代ヨーロッパのアイデンティティの確立に寄与したのでしょうか、それに先立って、17・18世紀の哲学による中世からの切断もあった。この切断については、かならずしも十分に語られていない印象をもちました。また20世紀でも、たとえばアーレントのように、古代ギリシアに帝国主義とつながらない政治のモデルを見出していくという立場もある。いずれにせよ、古代ギリシア問題を考える点で、本書は興味深く、かつ刺激的です。

土屋 問題は18-19世紀のように、ギリシアを文化的・政治的な正統化の根拠とすることがいまだに公然かつ隠然と続いていること。だが、文化とは交流＝交通がつくられる場そのもののはずです。たとえ齟齬をはらんでいてもコミ

ュニケーションが存在すれば、そこには文化があり、そのつど読みかえられるべきアイデンティティがある。本書の言語学的な考証に不安を感じないでもないが、大きな打ち上げ花火として、ヨーロッパの文化とアイデンティティについての基本的な構図はたしかなものだと思う。

大野 学問・人権・科学は古代ギリシアがつくりだしたものという、古代ギリシア文化至上主義はいまだに根強い。それは左派的な学問の環境のなかにすら残存しています。だから、本書の主張に共感するものの、一方で反対勢力の厚みにも注意が払われるべきだと思う。これだけの碩学があえて「アマチュア」として問題提起をし、それに数々の「専門家」が応接する。日本の人文系学問の状況を考えるならば、同じような試みは困難だろうし、またそれによって活発な論争が巻き起こることもないのではないのでしょうか。本書の存在自体が突きつけているのは、われわれの文化の衰弱であり、その結果としてアイデンティティのいわば物象化という事態をまねいているのではないかということです。「美しい国」というような言説はその端的な兆候にほかなりません。だから本書によって西洋中心主義が払拭されたと考えることは愚かです。本書をめぐる徹底した議論を可能にするような文化的な厚みがあつてはじめて、なんらかのアイデンティティの変容も生じる。問われているのは、われわれの文化とアイデンティティなのです。❧

(2007/6/30)

### 二項対立のワナ

#### ● 生江 明 (日本福祉大学教員/社会開発)

マルクスがマルクス主義者ではなかったように、プラトンもプラトン主義者ではなかったとするなら、正統性の争いという二項対立は、いつもいかがわしさに満ち、それが卑猥であればあるほどに華麗なる衣装をまといたがる。正統性の主張には、常に基点が必要となる。すべてはどこから始まる、というデカルト平面上の原点である。パナールが本書で示そうとするものは、原点とはバザールのように賑やかなものであること。本舗と元祖の争いとしての正統性の背景に人種と文化の交錯するバザールを見せたことである。

正統性の主張には実体化され物神化された、「もの欲いげな」精神の卑猥さが臭うものである。ネオリベのそれが臭わせるのは、声高で居丈高な主張が、排他的であることによるのみ存在しうる瘦せた正統として、神の地位に上がろうとする腐臭である。

排他的所有を基盤とする「生の所有」と異なる非排他的非所有、すなわち水や草地を独占しない「生の共有」を掟とする社会がある。東アフリカ大地溝帯に暮らす遊牧・農耕社会である。そこでの村落調査から学んだのは、排他的二項対立が暴力のメカニズムのワナにかかってしまうということである。

### 「黒」の混入

#### ● 入江公康 (文教大学他教員/社会学)

「捏造」についての2冊。この『ブラック・アテナ』と、もう1冊ロビン・G. ケリー『ゲッターを捏造する』(彩流社、2007、原題 *Yo Mama's Disfunktional*)。強引に結びつけるなどの謗りを受けそうだが、両者、時代場所ともに隔てるにもかかわらず、“無自覚な”人種主義を炙りだす点でなら同一だ。前者が古代ギリシアの「エジプト・レヴァント起源」(つまり黒人文化に起源)を執拗に明かそうとすれば、後者は合衆国黒人ゲッターの「貧困の文化」の虚偽を丹念に剥ぐ。

白い世界が「黒」を回避すべく様々に凝らす粉飾と意匠——「黒人」はしばしば種々の文化生成の主体でありつつも奪われ続けたのであり、その多産性はつねに「なにか違うもの」へと捻じ曲げられ、でなくば抹消された。「ギリシア」篡奪による西欧の「優越」、あるいはゲッターの営み(一例、「ダズンズ」と呼ばれる言葉遊び)のその「貶置」。

雑種の交配を認めえないという(混濁)を否定するその動機不純に、いい加減われわれは気づくべきであり、混じるとはある種の強度なくして成立しえず、「漂白」されるとき殺ぎ落とされるものの豊穣ははかりしれない、ということである。

### 文化は「引き算」ではない

#### ● 李 鳳新 (日仏翻訳家)

『ブラック・アテナ』が出版された1987年、世界で最も長いといわれた戒厳令が台湾で解除され、本土化(台湾化)が民主化とともに加速し始めた。戦後の台湾では親米反共政策が中心で、ほぼ9割の研究者がアメリカの学問・民主政体・法制を学び、それを忠実に輸入してきたため、西洋文明の理性と科学を批判的に捉えることがほとんど無かった。加えて、アイデンティティ・ポリティックスによる国内での多様な歴史観を巡る論争が中・米・日の歴史地政学的関係と密着し、族群(エスニックグループ)間の対立が未だに解消できていない今、未来に向けてのコンセンサスの形成は非常に困難な状況にあるといえる。昨今では、中華民族と異なる台湾人文化史を重視し、「引き算」の編纂手法で書き飛ばされた新台湾歴史教科書も現われている。

ナショナリズムの高揚が再び知の歪曲に利用されない為にも、『ブラック・アテナ』が示唆する多くのことから学ぶことは、「(起源)の更なる向こうは何か?」に対する応答の可能性を探り当てることになろう。実際、新台湾人が見せる同一性の変容や不安定さの如く、絶えず受容し合って生きていることそれ自体が文化の実態であるのだから。



● 大野英士 (早稲田大学他教員/文学)

## 「学問」に対する根源的な批判を可能にするのは大学という「象牙の塔」だ

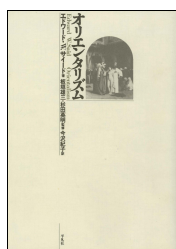
「中国やエジプトにも昔から芸術や科学はあった。しかし、それはロゴスによって統一された学問ではなかった。いやしくも学問の名に値するものを生み出したのは、古代ギリシアであり、西欧なのだ。私たちはそれを忘れてはならない。」

私が、博士論文執筆のためフランスに滞在していた1990年代の終わり頃、パリ第7大学でギリシア哲学を講じていたある教授は、大学主催のシンポジウムの席上でこう言い放った。

マーティン・パナールの『ブラック・アテナ I』という大部の本の存在に気づいたのは、ちょうどその頃、原著出版から10年たって、PUF (フランス大学出版会) から仏訳がでた時だと記憶している。それからさらに10年。今回、ようやく邦訳された『ブラック・アテナ I』を読んで、改めて強烈な印象を受けた。

パナールの仮説の構成は明快だ。現代、ヨーロッパ、アメリカ、そして彼らの「文明」の影響を受けた日本を含む非ヨーロッパ世界においても、古代ギリシアは北方起源のアリア人によって作られた本質的にヨーロッパ起源の文明として理解されている。しかし、ヘロドトスやプラトンをはじめ、古代の著作家はギリシア文化はエジプトやフェニキアなど先行する文化に多くを負っていることを示唆していた。前者「アリア・モデル」に、後者「古代モデル」を対置し、さらにパナール自身が独自の解釈を加えた「修正古代モデル」の復権を図ろうというのだ。

しかし、この第1巻の記述の目的は、アリア・モデルと修正古代モデルを直接、比較し、それぞれの根拠を検討することではない。



パナールによれば、アリア・モデルとは、近代以降、西欧が非西世界を圧倒し、地政学的にも西欧が非西世界世界の侵略を正当化していく過程で、自己の文化的な優越を確認するために、必ずしも意図されたわけではないが、しかしある明確な方向性をもって確立されたイデオロギー装置である。そして、パナールは、それ自体、瞠目すべき文献学的な作業によって、アリア・モデルがほとんど自明なものとして受容されているにいたる歴史的過程で抹消されたもう一つの知のパラダイムを再構成しようというのだ。その意味で、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(平凡社、1986)や、アラン・ド・リベラの『中世知識人の肖像』(新評論、1994)と並んで、西欧文化中心主義に対する西欧内部からの自己批判であるとともに、西欧中心に成立した「学問」に対する根源的な批判という射程を持つ。

しかし、日本の読者が考えなければならないのは、欧米には、時の政治や経済の動向に左右されない悠久普遍の学問をともかくも追い求めることを保証する「象牙の塔」が存在し、膨大な知的生産物が社会が享受しているという事実ではないのか? 効率化を口実に、数少ない外国語専門大学で、少数言語の講座が軒並み削られるような昨今の日本の知的環境の中で、冒頭のフランス人哲学教授の暴言に自信をもって「それは違う」と反論することができる大学人・知識人は果たしてどれだけののだろうか?

## 文化の混成と

## 「ヨーロッパ・地中海文明博物館」の誕生

● 出口雅敏 (駒澤大学他教員/文化人類学)

フランスの人類学・民族学系統の博物館で、大規模な移転や統廃合が実施されている。1969年以降、民衆文化の展示と研究の拠点だった「民芸民衆伝統博物館」も、2008年にはパリからマルセイユへと移転する。だが、この移転はたんなる「引っ越し」ではない。新しい博物館の名称は「ヨーロッパ・地中海文明博物館」である。

それは大きな方向転換だろう。民衆文化を「内向き」に対象としてきた時代とは異なり、ヨーロッパや地中海という「外向き」に視野を拡大しつつ、自らを位置づけ直そうと舵を切ったのである。そこで示されるのは文化の差異や類似、あるいは文化借用の複合的な様態であり、研究体制もフランス民族学を出発点としながら、超領域的な社会文化研究を目指すという。

じっさい予告されている常設展示は、「天」、「水」、「都市」、「道」、「男性と女性」と趣向が凝らされている。また「愛し方」、「全体主義」、「ヨーロッパと地中海の料理」、「神」、「残骸・廃墟」、「オリエンタリズムとそれ以後?」、「カフェ」等のアクチュアルな特別展。そして展示物の収集は、「結婚」、「民族楽器コルヌミュージ (バグパイプの一種)」、「クレッシュ (キリスト誕生群像の模型)」、「エイズの歴史と記憶」、「落書き」等のテーマに即して、ヨーロッパあるいは地中海というスケールで進められている。

こうした博物館の変容は、その役割についての再考もうながす。すなわち、この新しい博物館は「市民博物館」であることを謳う。もはやコレクションの展示そのものは博物館活動の目的ではない。その展示を通じて、複数の文化が力動的に交錯する「フォーラム」として自らを再定義しようとしている。文化は混成的な出来事である。それが『ブラック・アテナ』の根本的なメッセージであるとすれば、博物館という文化展示の現場も、文化をめぐる力場へと変わろうとしているのである。

### 状況雑感

## 表現は止められない

永田 淳 (早稲田大学コーププラザブックセンター)

パナールの仕事はとても魅力的で楽しい。それはかつてフーコーが語ったように、「歴史への依拠 [...] が意味をもつのは、今日そうにあることがいつもそうだったわけではないことを示すことを歴史が役割にまつかざりにしている」\*であるからです。ところが『ブラック・アテナ』が例の論争の空間で読まれるとき、あの騒々しい主張に私たちの楽しみは奪われてしまい、本を捨ててしまいたい気持ちにさせられます。論争とは、ルフェーヴルがいう「空間の表象」——経験や知覚を思考と同一視する、支配的な、思考された空間——で起こるもの、つまり知の正統性をめぐる争いなのであって、私たちは自らを支配するものを選びとれるなんてまぶらなのです。

私たちは実際に本を読むその感覚を思い出さなければなりません。それは「表象の空間」——直接に生きられた空間——においてなされ、必ず身体の所作を伴います。身体は欲求の発現なので、それはまさに表現と呼んでいい。そして表現は既存の空間をねじ曲げて領有することをせずにはいない。それゆえ思考が支配を逃れるのは表現の只中においてだけなのです。

今、何もかもコントロールを目論む連中が表現＝空間の絶滅をめざすなか、根源的に表現する者である学生が標的にされ、大学からは空間が奪われようとしています。それでも夜になると学生はダンスしに集まるし、閉店後の生協の書店で開かれる講義\*\*に自ずと集まるのです。そしてこれからもそんな最も大学的な空間は次々うまれるはず。表現は、その喜びゆえに、止めることができないのですから。

\* 『ミシェル・フーコー思考集成 IX 自己・統治性・快楽』p. 323

\*\* 早稲田大学生協ブックセンターでは、07年10月より閉店後の店内で「大学の夜」と題された連続講義が開かれています。

第一回は矢部史郎氏 (著作家、『VOL』編集委員)、第二回は池上善彦氏 (『現代思想』編集長) を講師としてお迎えしました。

編集後記▶哲学者には三つのイメージがあるという。第一の典型はプラトンで、抽象の高みへと「転向 (conversion)」していく。それに対して第二の哲学者は「転覆 (subversion)」を企て深みへの降下をめざす。だが、忘れてはならないのは、この降下はつねに表面の現実性に出くわす。そしてその遭遇に賭けるのが第三の新しい哲学者であり、高みと深みが重なり合う表面の「倒錯 (perversion)」を肯定する (ドゥルーズ『意味の論理学』河出文庫、2007) ▶『ブラック・アテナ』はたんなる「転覆」の書ではないだろう。古代ギリシア文化の浄化＝「転向」という、近代の詐術を覆すだけではない。見出されたのは文化の常態としての混成＝「倒錯」であり、その模倣と伝播の輻輳した運動において、古代ギリシアという輝かしい出来事が生じたことである▶今日、われわれの文化は十分に混成的だろうか? 新しいギリシアが立ち現れる兆候があるだろうか? 来るべき哲学者とともに、こう問うことが『ブラック・アテナ』を読む意味であり、黒か白かは問題ではない。そこには時空の倒錯をはらみつつ、普遍的であるほかない出来事への秘かな予感がみなぎっているはずである。

(白石嘉治 上智大学他教員/文学)